

福原 亮 敬 著

「佛陀根本教  
説への智慧 四諦論の研究」

玉 井 威

本書は、婆藪跋摩造、真諦訳、四諦論四卷（大正藏第三十二卷所収）に対する研究である。

本論書は、上記の漢訳のみが伝わり、原文テキストはもとより、チベット訳も現存しない。また同じく真諦の手になる四諦論疏三卷の存在していたことが、諸経録によって知られるが、これも現存していない。

以上の如き事情もあってか、これまでに本論書に対するまともな研究は、実に皆無に等しく、国訳すらなされていない状態であった。而るに、この度、著者によってこれを一書にまとめ得たのは、著者の言われる如く「阿毘達磨の諸論書の光りを当てたからにはかならない」（四頁）が、有部阿毘達磨諸論書等に造詣の深い著者にして、初めてこれをよくなし得たと言ふべきであろう。斯学にとって誠に慶ばしい事である。

本論書は決して容易な漢訳ではないが、一読してわかることは、「四諦について、本書ほど広い視野で問題を提起し、ふかく沈潜思惟して諸説を紹介し、佛説の根本を解明しようとした

ものは、ほとんど他に類を見ないと考えてよいであろう」（三頁）と述べておられる通りで、四諦に関する能う限り数多くの問題が取り上げられている。ただ、その際、各問題ごとに多くの諸説が紹介されているが、その多くは、作者によりその評取がなされておらず、これが本論書の大きな特徴となっている。本書はこの様な内容を持つ論書の研究である。

本書は、序論、本論及び結論よりなるが、附録として、「大乘経説における四諦説」が紹介され、索引、英文要旨を加えて一書となしている。まず序論では、十章にわたって本論書に対する研究がなされている。以下、順序を追って、その内容の大略を示しつつ、私感を加えていきたい。

第一章では、まず作者 Vasuvaman（婆藪跋摩、世鎧・世曹）を経部師とみる説と有部の論師とみる説の二つが紹介されている。前者は俱舍論所引のある有余師を、称友の俱舍論疏と普光の光記によって経部の一長老とするものであり、後者は有部の二伝（大正五五・八九a以下薩婆多部記目錄序第六）が伝える婆藪跋摩に基づくもので、これらによれば、婆藪跋摩は法勝以降世親以前の人ということになる。著者は、これら二説による Vasuvaman を四諦論の作者と同一視する見解を斥けて、本論書中に俱舍論（阿毘達磨藏論）が引用されていることにより、世親以後の出世の同名異人とするのである。しかし問題は、果して阿毘達磨藏論なるものが俱舍論であるのかどうかである。

本論書には、阿毘達磨藏（論）或は藏論という名で引用され

いる論書が存するが、これら二論書を同一のものとする従来の見解に対して、著者は両論を異なるものとみて、阿毘達磨藏論のみを俱舍論であると推定している。両論が異なることの理由はここには示されていないが、次の諸点から推量されよう。即ち、本論書で同一問題中に両論説を別々に紹介している点(三九八c)、また「阿毘達磨及び藏論」(三七九a)と説かれてある中の阿毘達磨を阿毘達磨論のことと解するならば、両論は別書ということになる。また八聖道中の精進・念・三摩地の定義が藏論説として、相・用・縁・義の四方面からなされている(三九七a~三九八a)のは、少くとも俱舍論中には見出せないものである。従って、両論が異なることの推定は、恐らく正しいであろう。阿毘達磨藏論が俱舍論であることについて、著者は俱舍論のうちに類似の文を求め、阿毘達磨藏論のそれと比較検討しているが、ここで取り上げられた二例は、いずれも著者の言われる如く、俱舍論の取意とも考え得るが、しかし必ずしも全同とは言えず、幾分問題が残るようである。ここでは取り上げられなかった本論書三九八頁bの阿毘達磨藏の説や俱舍論梵本の比較検討も必要であろう。ところで、阿毘達磨藏なる語は、四諦論と同じ真諦の訳になる俱舍釈論に二十箇所ほど見出されるが、それらは玄奘訳俱舍論では、大体において、本論、根本阿毘達磨、対法などとなっている様である。本論、根本阿毘達磨が必ずしも、発智論のみを指すとは限らず、品類論や識身論であることもある。従って、阿毘達磨藏は発智論等を指すと考えられるが、四諦論の阿毘達磨藏(論)も発智論等を予想す

ることも可能ではなからうか。俱舍論梵本には、これに対して *gāstra, abhihamma* の語が見出される。しかし本論書が俱舍論に拠っている箇所が存在することは甚だ明了で、著者の言われる通りである。例えば釈滅の仮実に関する論、無表の実有非実有に関する論であるが、その場合、阿毘達磨藏論からの引文であるとの明示はない。

本論書の部派撰属については、論初の序偈に「大聖栴延論 言略義深広 大徳佛陀蜜 広説言及義」と説き、「我見両論已今 則捨広略 故造中量論」と本論述作の意趣が述べられているが、その中の栴延は有部の発智論の作者、大迦栴延子(Mahākātyāyanaiputra)であり、佛陀蜜(Buddhamitra)は、付法藏因縁伝五(天正五〇・三二四a)の伝える師と考えられるから、共に有部の二大論師であることより、著者は本論書が有部のものであるとする。しかも「たとえば無表の解明において、『俱舍論』の筆法と同様のものがあって、自身有部でありつつも理の勝れている経部説を紹介するに努めた点、全たく瑜伽行派への転入前の有部論師世親に近いものがみられる点」(九頁)で、正統有部とは異なる別の有部であろうと推定している。この推定は、本論書を精査した者のみの言い得ること、この点だけでも著者の大きな功績であろう。

第二章では、本論書に引用の経論書が悉く列挙されている。一見して引用の経論の種類が多いことに注目されるが、經典は全て阿含・ニカーヤに属するものであり、論書は十一種のうち二・三の論書を除いて、未詳のものである。また本論書で散見

てせられる部派名も列挙されているが、その中に説一切有部の名が見られないことよって、本論書が却って有部のものであることを暗示すると著者は指摘している。なお、ここで掲げられた分別説部の名は、本論書中には見出せないから除くべきである。

第三章「四諦の經典」は、その題に示す如く四諦に関する經典の解説である。四諦に関する經典と本論書との関係の考察は、次章に於てなされているが、ここではまず、四諦に関する經典が悉く列挙、略解されており、精細をきわめている。その数の多いのに注目されるが、著者は、それら一連の四諦経類と称するものの中から、特に分別聖諦經第十一（大正一・四六七a—四六九c）等の比較的長い三経について、それらの内容を二十三の項目にわけて取意略記し、三経の類似することを指摘する。

著者によれば、それら三経が四諦論の所依ではないかとさえ考えられるものであると言う。しかし、それら三経と本論書の内容が、本書で一一比較検討されているわけではないので、読者は本書第九章に図示された組織の概要と、それら三経の内容とを比較してみる必要があるだろう。

第四章は「通申と別申」であるが、およそ論書が通申論か別申論かということは、論書の性格を知る上で、一つの重要な視点であるが、著者は、ここでこの堅実な方法論をとっている。

阿含部に属する諸経の中で、特に四諦を取りあげたものは、前章で示された如く種々の四諦経類であったが、著者は「それらの中の何れかの特定の經典を註釈したのが本論とは言えないに

しても、少くとも作者は『四諦経』と称する經典類を手許において、それにもとづき、その順序を追いながら逐次百八十余の諸問題を見つけ出し、その解答に諸義を掲げ示し、それによって佛意を開顯したのであることは、充分推察しうることである」（三四—三五頁）と述べ、この意味で四諦論は全く四諦経、少くとも四諦経類の別申論であり、このことを論書の名称がよく表わしていると言う。更に、この結論に確証を与える意味でパーリの分別論第四諦分別の中の経分別の文が、一種の四諦経論、その始源的なものの一つとして紹介されている。

四諦論は四諦につき種々に諸門分別をなしているが、第五章では、この点で本論書と比較検討すべき資料として、パーリの分別論第四諦分別の三問分等の諸門分別が詳細に紹介されている。

第六章では、諸部派の四諦に関する教義が異部宗輪論等に依って紹介され、四諦説検討の用に供されている。

第七章では、本論書中に散見せられる諸部派の教義が「他派の思想」の題下に紹介されている。ここに他派というのは、自派即ち有部以外という意味で、分別部等の六部派である。その中から著者は分別部と分別説部と仮名部の三部派の同異を、赤沼『印度佛教固有名詞辞典』の *paṭṭatti*（部）の項を引いて問題とするが、分別説部については、著者指摘の箇所は「分別部説く」とあるのみで、ほかには分別説部の語は見出せないから除くべきである。著者は本論中の四諦の体相の教義の列挙の仕方が(1)諸法師(2)理足論師(3)仮名部(4)分別部(5)分別論(6)藏論と

いう様に區別してあることにより、少くとも真諦は假名部と分別部とを別の部派であるとみたとするが、恐らく正しいであろう。分別説部と分別部についても、著者は異なる部派と一応みておられるようだが、分別説部は普通 Vibhajyavāda (pāli: Vibhajjavāda) と言われるので、Abhidharmakoshasāstra (ed. by Pradhan, p. 296) に出ている Vibhajyavādin を玄奘は「分別説部」(大正二九・一〇四b)と訳し、真諦は「分別部」(大正二九・二五七c)としている訳例の存することよりすれば、恐らく両者は同じものであろう。或は順正理論は同箇所を「分別論者」(大正二九・六三〇c)として引いていることよりすれば、分別説部が大衆部中のもとも、南方上座部ともせられて、必ずしも固定した部派名でない如く、有部諸論書で言う分別論者(分別論師)も亦、特定の部派の者でないともせられている点を考えあわせるならば、これら三者は同じものとみることも出来るよう。因みに光記はこれを飲光部とする。

本論書中に経部の名で引用される教義は、そのほとんどが有部の無表実有論に対する経部の破析であり、それらが俱舍論中に引かれている経部のそれと、著しく類似していることを著者は指摘している。ただ本書六八―九頁の経部説に類似する俱舍論の文は、そこで指摘された文ではなく、本書三八四頁の註解にある文が、この場合ふさわしいように思う。

第八章は、本論書中にかがわれる大乘的要素についての考察である。著者が大乘的要素として八ほどあげているものの中で、最も紙幅を費して論じているのは、斥滅の仮実に関する論

である。ここは著者の指摘の如く、俱舍論を予想すること甚だ明了で、例えば三世にかけた涅槃不生の問題を経部の種子説で別釈したり、無法の境を縁することありとする経部の説などが説かれている。ここで俱舍論と対応する部分があげられているが、些か対応部分が前後して、明確さを欠く印象を与えるが、要するに本論書の斥滅仮実に関する論(三九一b―三九二a)は俱舍論卷六(大正二九・三四a―三五c)を念頭において論述されており、順序次第も相似している。ここで注目せられることは、俱舍論で有部の徴難とせられている処は、本論書では「外曰く」としており、経部の答を述べる際は、ただ「答ふ」としている点である。本論書が正統有部とは異なる有部のものであろうことは、著者によって既に推考せられたが、この部分によって見る限り、本論書は経部に加担或は全く経部の立場にあるかの印象を与える。その他、種々に大乘的要素が指摘されて、著者のこの分野に対する学識の深さをうかがい知ることが出来るが、更に大乘的要素の一つとして、次の点を付加したい。即ち、本論冒頭に「般若遍諸法 大悲撰衆生」に始まる序偈が存するが、ここに大乘佛教の特徴たる般若の智慧と佛の大慈悲が対句で示されていることが注目せられる。これが本論の劈頭に掲げられていることは、本論書の性格を考える上で、一つの指標となる。

第九章は、「組織の概要」である。本論書には、百四十五の問題標示がなされているが、著者の言う実際上の細分百八十七に基づいて、本論書の組織の概要が詳細に図示されており、読

者に益するところ大なるものがあると思う。

第十章では、婆沙論等の有部諸論書と比較しつつ、本論書の立場が考察されている。本論書の特徴は、前述の如く、ある問題に対して(一)諸義を列挙すること、(二)評取が極めて稀であることの二点であったが、まずこの点が他の諸論書と論の性格を異にすることが論ぜられ、つまりは論書製作の目的の相違に帰趣せられている。その目的について、著者は本論書の最初に明示されている外道破斥、四諦の聖教の顕揚という対外的理由と佛教内の党派的対立抗争の停止という対内的理由から本論書が製作されたとし、評取することの稀であることも、この理由によることを示している。そして、外道を斥け正法に帰せしめ、四諦正見の人たらしめんとした発智論、婆沙論の精神を受けて、四諦論は末端の論議に時を費すことなく、取捨任情として、「要は四諦の真意を知り、正見にもとづいて、正行実践の人たらしめたい、というのがその目的をなしているのである」(一〇八頁)と結論される。

以上が四諦論に対する研究序説とも言うべきもので、これによって本論書の梗概を知ることが出来るであろう。

更に本論は、本論書の和訳とその註解からなっているが、以下、若干の気付いた点を述べてみたい。まず原語を当てる操作についてであるが、この種の問題に対しては、初めに本論書がいかなる原語で書かれていたかを考慮に入れる必要がある。

本書一五八頁で「勝奢波葉喻(經)」の原語を「巴利語の *siriṇṇapa* (毒蛇) の音写」*スリシナパ* が、*スリ* は *Skt. śiraṇṇapa*

(Pali: *śiraṇṇapa* 樹の一種)をあてるべきであり、また本書二四三頁で「波伽等焼然成灰」と本文にある中の波伽を不明としながらも、これに普通バリー語と考えられる *pakka* 或は *pakka* が予想されているが、ここは断定はできないが、*Skt. pakka*とも考え得る。本書二七〇頁で、頗悉多、柯羅、波尼を渴愛の別名とするが、ここは譬えとして、人の手に別名あるのを言うのだから、順次 *hasta*, *kara*, *pāṇi* をあてるべきであろう。訳については、本書一四七頁に「害生静出」と本文にあるのを害生(苦諦)、静(静の誤植)出(集諦)としているが、恐らく害(苦諦)、生(集諦)、静(滅諦)、出(道諦)とすべきであろう。訳文はおおむね平易で、註解も豊富である。ただ訳文中に時として旧訳たる真諦訳の漢語が用いられており、その点で多少の戸惑を感じた。巻末の英文要旨の中で、四諦論の原語 *Catuhātaya-Nirvāṇa* が与えられているが、原典もチベット訳も存在しない現在、これは推定の域を出ないであろう。南条目錄はこれを *Catuhātaya-sāstra* としている。同じ英文要旨一三頁の *kāyavedāna* は *kāyikavedāna* にすべきであろう。なお本書全体について言えることだが、誤植等がかなり目立ったのが残念であった。内容については、諸法を相・用・縁・義の四方面から定義したり(三九七a—三九八a)、或は相・事・縁の三方面から定義したりする(三八一c以下)のは、バリーで相・味・起・足処の四方面から定義するのを思わせて興味もたれた。また、信が正見の撰とせられ、八聖道中に正信を加えない理由が示されている(三九四b)のは大いに注目される。

以上、卑見を雑えて感ずるまゝを記したが、四諦論の研究書として、まとまったものがない現今に於て、本書の刊行は高く評価されてよいと思う。これによって親しく本論書に接するこ

とができるようになり、四諦の研究は今後一層の隆盛を見ることであろう。

(昭和四十七年二月、永田文昌堂・A5版、四、八〇〇円)